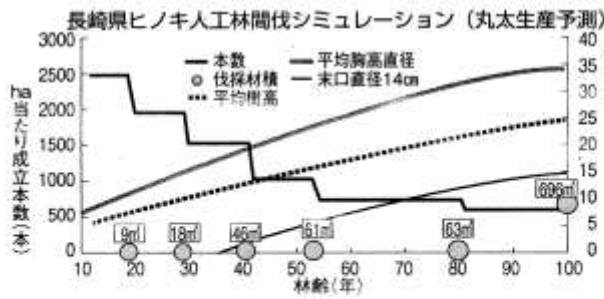


# 農業技術 プリズム

長崎県は、県土の約6割を森林が占め、人工林は約9万1000ha



## 間伐適期予測システム 計画的な木材生産へ 杉、ヒノキで活用を

00秒で、大半が杉やヒノキで育つ。木の成長には時間がかかるため、林業では、どのような林に育てていくかの長期計画と、実際に向けた間伐時期の計画策定が重要だ。そのため、長期的

な管理に活用できる簡便な間伐時期の判定指標が求められてきました。また、木材として伐採・搬出される丸太の太さや長さは、樹齢や土地の違いによりさまざまです。一方、市場では一定の規格があり、価格が異なるため、

伐採現場では立木の状態でどのような規格(大きさ)の丸太が取れるかの判断が求められます。そこで、林齢100年生までに必要な間伐の適期を判定し、収穫される丸太の数量を予測するために、これまで当センターで蓄積してきた県内の杉やヒノキの調査結果を基に、長崎県の杉・ヒノキに対応した「間伐適期予測システム」を作成したので紹介します。

このシステムでは、現在の人工林の状態(樹齢、樹高、1秒当たりの生育本数)を入力すると、間伐が何年後に何回必要か試算できます。同時に、そのときに伐採される材積(幹の体積)と、どの規格の丸太を収穫できるかの予測が可能です(図)。

県内の人工林の多くは、植えてから50年を経過し、利用可能な資源です。間伐材も木材として利用できることから、計画的な木材生産を推進するために、このシステムの活用が望まれます。

(県農林技術開発センター 田嶋幸一)